

## エラ・マイヤール(Ella Maillart)の足跡

- 1903 2月20日、スイスのジュネーブに生まれる。毛皮商を営む富裕な父は、広い見識と視野を備えた人物で、世界の動向に通じていた。母はデンマーク出身の、モダンでスポーツ好きの女性。そのころ女子には珍しいスキーに熱中していた。
- 1913 レマン湖畔の、ジュネーブの飛び地であるジャントーに移り、家族は充実した家庭生活を満喫。
- 1914 エラは、「キニ」の愛称で呼ばれる。そこで生涯の友人、エルミーヌ・ド・ソシュール(愛称ミエット)に出会う。病弱なミエットは、スポーツを通して身体を鍛えようと、エラとともにレマン湖でヨット操縦にはげみ、13才で2人はレガッタレースに優勝。冬はスキーに熱中。第一次世界大戦の勃発を知り、「エゴイストでデカダンな戦争」と決めつける。1日に1冊の本を読破する勢いで、いつか、遠くへ旅立つことを夢見つつ、少女時代を送る。
- 1919 スイスロマンド地方初の女性ホッケークラブを設立。ここで「力と忍耐の限りをつくして、目的を成し遂げる」というスポーツマンの精神を学ぶ。
- 1922〜3 健康上の理由からコートダジュールで冬を過ごすエルミーヌが、7メートルの一本マストのヨットを購入。2人で、モーターなしでコルシカ島へ航海。カンヌで、大西洋単独横断を成し上げたアラン・ゲルボーに出会い、のち女性2人で同じ冒険を試みるが失敗。
- 1924 ヨットの訓練を続け、パリ・オリンピックのレガッタ部門で、スイス代表となる。 ついで、スキーのナショナルチームに所属し、1931年から34年まで、連続して世界選手権にスイス代表として出場。「ジュルナル・ド・ジュネーブ」紙の広告で、英国でのフランス語教師の職を見つけ、渡英。教師のかたわら、テムズ川の大型平底帆船「ヴォランテア」号で働く。
- 1925 見習い水夫として働きながら、ついに4人乗りの小型帆船「ボニータ」号を得て、ミエット他とマルセイユからコルシカ島方面へ、ユリシーズの足跡を辿って航海。そののち6週間にわたり、クレタ島でフランスの発掘団に加わる。この頃から、エラは自分の体験を記事にしたり、講演をしたりして、小遣い稼ぎをするようになり、次第に名前が知られるようになる。
- 1926 3月にジュネーブを去る。ミエットが買った丈夫なバトロール船を、小型帆船に改造して、「アタランテ号」と名付ける。ミエットほか合計四人で、再度ジェルボーの冒険のあとを辿るが、途中ミエットの病気のため断念。
- 1927 ミエットが去ったため海での生活を断念。「陸との戦い」をはじめることになる。やや途方にくれたエラは、秘書、モデル、端役の俳優、映画のスタントマンなどの職業を転々。1929年には、ミュンヘンで、スキー映画に出演。ミュンヘンに、スイス女性スキークラブを設立。しかし、「陸に上がった河童」の心境で、「海にいるか、スキーをしている時以外は、見るもの、読むものすべてが中途半端」と述べているとおり、鬱状態を味わう。戦争の後遺症である無駄な長談義と見せかけの理想論が、ついに真の平和をもたらすことが無いことを見抜き、新興のソ連に一片の希望を見出す。当時まだ神秘の国であったソ連へのヴィザを申請。それを待ちながらベルリンへ赴き、英語を教えながら、ドイツ語を習得。合間にはユニヴァーサルスタジオでエキストラ出演したりした。隣のスタジオでは、マレーネ・ディートリヒが『嘆きの天使』を撮っていた頃である。
- 1930 ベルリンで、ロシアの亡命者たちに出会い、ロシアの若者やロシア映画についてのレポートを計画。ついにロシアのヴィザがおり、エラは、ジャック・ロンドン未亡人から50ドルの餞別を貰って、勇躍、モスクワに向かう。モスクワではトルストイ伯爵夫人宅に下宿。ソ連の映画監督 プドフスキーと知り合い、『アジアの嵐』の中のイメージに魅せられる。これがその後のエラの一生を方向付ける東洋への傾倒の前兆となる。8月には、学生のグループに加わり、モスクワを発って、コーカサス方面を探訪。その後、黒海とクリミア半島を通して、単身モスクワへ戻る。パリのファスケル社がこの旅行記を出版、エラは、はじめて6千フランの原稿料を手にする。エラの執筆は、いつも必要に迫られてのことで、その印税収入によって、彼女はより自由に旅行に出ることができるようになった。

- 1931 スイス女子ホッケーチームを主宰。スイスのスキーナショナルチームの一員として、1931年(ミューレン)、1932年(コルチナ・ダンペッツォ)、1933年(インスブルック)、1934年(サンモリッツ)、スイスに勝利をもたらす。
- 1932 モスクワで出会ったロシア人の二組の夫婦とともにトルキスタンへ査証なしで旅行。ライカのカメラをたずさえ、キルギスタン、カザフスタン、ウズベクなどに到達。天山山脈では5千メートルまで登頂。当時地図にも記されていない「禁じられた中国」と呼ばれたタクラマカン砂漠を目のあたりにして、必ずそこに戻ると決心。アルマアタ、タシケント、サマルカンド、ブーカラ、アラル海などを、通行許可なしで危険地区を回避しながら旅し、12月にモスクワに帰着。その足跡は、持ち帰ったフィルムとメモとともに、パリで高く評価された。その旅行記は、1934年、『Des Monts célestes aux Sables Rouges (赤い砂と聖なる山)』としてパリで発刊される。
- 1934-5 「プチ・パリジアン」紙が、特派員として満州に派遣、マルセイユから船で出発、当時日本軍の支配下にあった満州で、日本の兵士によって殴られたり、銃床や足で蹴られるなどの暴力行為を受ける。この体験は五、50年に及ぶ旅行のなかで唯一のもので、全般に、アジアの人びとの親切心に多く出会っている。  
満州に3カ月滞在、数か月の記事をパリに送りながら、次第にエラは中国領トルキスタンに興味をひかれる。そこは当時渡航禁止の地域で、4年ほど前から現地の情報は皆無であった。新疆、カラコルム山脈経由でインドへ出ることを決断。冒険家のスヴェン・ヘディンから、北チベット経由、ツアイダム高原を抜けるルートを薦められる。ここはあまりの難所のため、中国政府も通行禁止令の必要もないとみなしていた。エラは、「タイムス」の特派員だったピーター・フレミング(『ジェームス・ボンド』シリーズのイアン・フレミングの弟)と共に、2月に北京を出発。合法的なヴィザを持たないため、官憲のコントロールを避けて、果てしない未知の旅を続ける。極貧と極寒に耐えて、シルクロードの本流と合流、タクラマカン砂漠のオアシスを転々として、パミール経由、7カ月後にスリナガル着。カシュガル経由でインドに入る。現在「新シルクロード」の「青海の道」として紹介されたと同じ、東西交易の道をたどる、7カ月間、約2千キロの筆舌に尽くしがたい旅を終える。
- 1936 1月に父の死。レバノンに赴き、前年の旅の記録を『禁じられたオアシス—北京からカシミールまで』(Oasis interdite—de Pékin au Cashmere)を書く。収入を確保されたエラは、そののち、アジアの真髄とその探索のためにアジア大陸のあちこちに旅するようになる。この年、同行したピーター・フレミングも『タータリー便り、北京からカシミールへ』を出版している(Peter Fleming:『News from Tartary』)。
- 1936 再び「プチ・パリジアン」紙の委嘱を受けて飛行機でカラチへ赴き、帰路はインド、アフガニスタン、イラン、トルコなどをトラックやバスに便乗して、ルポルタージュを続けながら、ヨーロッパに戻る。帰国後、これらのルポをもとにヨーロッパ各地で講演を行う
- 1939 6月にフォードの車に乗って出発。同行したのは友人のクリスチナ(本名アンヌマリー・シュワルツェンバッハ)で、のち、この友人が麻薬中毒と闘う苦難の様子を描いた『苛酷な道 The Cruel Way』を書く。『アフガンの遊牧民』のドキュメンタリーフィルムの撮影に着手。この年、カブールで第二次世界大戦の勃発を知り、第一次世界大戦当時の悪夢を思い出し、ヨーロッパには帰らずインドに行くことを決める。
- 1940-5 1939年11月、カブールを去って、ペシャワール、デリー経由でケッタへ行き、撮影の完成を待つ。かつての航海生活を描いた『海のヴァガボンド(Gipsy afloat)』の著作を開始。英語を話す人びとの間に暮らして、著作も英語で始め、この本は1942年にロンドンで発刊。1940年9月、『アフガンの遊牧民』の初上映。10月には、マドラス、ボンディチェリー経由で、11月、運命の地ティルヴァナマライに到着。印税にたよる生活を細ぼそと続けながら、インドの著名な賢者、ラマナ・マハルシの修業道場(アシュラム)に入る。のちにエラは、ケララ州の、賢者アトマナンダ(クリシュナ・メン)にも学び、これらの師は、エラに「不二一元論」を説いた。1941年の6月から11月にかけて、自伝的著作、『クルーズとキャラバン(Cruises and Caravans)』をアメリカの出版社の依頼で

- 書き、1942年に発刊。1943年、前記の『苛酷な道』を書き始め、また一九四四年には愛猫と旅したインドの様子を描いた『T-Puss』を書き始める(1951年発刊)。1945年のはじめ、シッキムと、チベットの南へ足を踏み入れている。第二次世界大戦終結を聞いて、スイスに戻る。
- 1945-8 画家のエドモン・ビーユに招かれて、1946年の夏をアニヴィエの谷のシャンドランで過ごす。標高2千メートルのこの村の佇まいに魅了されて、1948年に山荘を建て、ラマナ・マハルシ師のアシュラムを見下ろすアルナチャラ山の名前をとってアチャラ荘と名付ける。それ以後、エラは初雪から最後の雪までの期間を除く1年の約6カ月をここで過ごすようになる。はじめて自分の住みかを持って、幸福ではあったが、冒険への思いはさらに強くなる。
- 1951 冒険旅行を再開。門戸を開放したばかりのネパールで、『ネパールにただ独り』のフィルムを撮影。『シェルパの地(Land of Sherpa)』を書き 1955年発刊。ネパールに魅せられたエラは、その後何度もこの地に旅し、1965年には、エベレスト登山のベースキャンプまで達している。
- 1957- 母親の死。旅することが生きる目的のようになっていたエラは、毎年インドへ旅行して戻っては、講演したり、ルポ記事を書いたりした。1957年からは、少人数の参加者を率いて、インド、ネパール、ブータン、エベレストの麓、中国、チベット、ジャバ、バリ、日本、イエーメンなど、アジア各地に旅行団を編成し、人々に新しい発見を示した。
- 1990-7 ローザヌのエリゼ博物館に、2万枚に及ぶ所蔵ネガを寄託。エリゼ博物館はこれをもとに、エラ・マイヤールの写真展を構成、スイスのみならずヨーロッパ各地を巡回。展示会に続いて、彼女の約2百枚の写真により、現代が失った歴史的に重要な世界を示す刊行物『今見た世界(La Vie immédiate)』が編集される。最晩年の10年間は、エラが愛してやまなかった、この地球の環境問題に熱心に取り組んだ。
- 1997 3月27日、シャンドランにて逝去。  
現在、この標高2千メートルの山村には、「エラ・マイヤール友の会」と村役場の努力により、「エスパース・エラ・マイヤール」が保存されており、彼女の足跡をたどることができる。